

# 教育・研究等業績一覧

履 歴					
フリガナ	ナガツ リエ	所 属	保育学科		
氏 名	永 津 利 衣	身 分	准教授		
学 歴					
年 月	事 項				
1988年4月	愛知教育大学教育学部音楽教室 入学				
1992年3月	愛知教育大学教育学部音楽教室 卒業				
1992年4月	愛知教育大学大学院教育学研究科芸術教育専攻(音楽学) 修士課程入学				
1994年3月	愛知教育大学大学院教育学研究科芸術教育専攻(音楽学) 修士課程修了				
2016年4月	日本大学大学院総合社会情報研究科人間科学専攻(心理学コース)博士前期課程 入学				
2018年3月	日本大学大学院総合社会情報研究科人間科学専攻(心理学コース)博士前期課程(人間科学修士) 修了				
2018年4月	名古屋市立大学大学院人間文化研究科 研究員(～2020年3月)				
職 歴					
年 月	事 項				
1994年4月	愛知県立名古屋養護学校 教諭				
1999年4月	愛知県立小牧養護学校 教諭				
2009年4月	愛知県立春日台養護学校 教諭(～2014年3月)				
2013年4月	愛知みずほ大学人間科学部心身健康科学科 非常勤講師 (～2021年3月)				
2014年4月	愛知みずほ大学短期大学部子ども生活専攻 専任講師				
2015年4月	豊岡短期大学通信教育部こども学科 非常勤講師 (～2018年3月)				
2018年4月	東海学園大学 教育学部 非常勤講師 (～2020年3月)				
2019年4月	岡崎女子短期大学 幼児教育学科 非常勤講師 (～2020年3月)				
2020年4月	拓殖大学北海道短期大学 保育学科 准教授 採用 現在に至る				
教 育 業 績					
1 担当授業科目(2021年度)					
科 目 名	出講場所	期別	曜日	時限	備 考
領域音楽表現A	リズム室	前期	火	3	
領域音楽表現B	リズム室	前期	木	4	
保育内容V(音楽表現)A	リズム室	後期	水	1	
保育内容V(音楽表現)B	リズム室	後期	火	3	
ソルフェージュ	リズム室	前期	水	3	
ピアノ即興演奏法	リズム室	後期	木	3	
ピアノ表現I	ML教室	通年	水	2	
ピアノ表現II	ML教室	通年	木	2	
特別研究	リズム室	通年	金	2	
保育実践演習	リズム室	通年	火/金	2/3	
保育実習指導I・教育実習指導(1年)	201/302	通年	金/火	3/5	
保育実習指導I・教育実習指導(2年)	201/302	通年	金/火	4/4	
保育実習指導II・III	101	前期	火	4	
総合芸術・専門研究		後期	月/金	5	

<p>2 現行授業の目標と教育効果及びそれに対する自己評価</p> <p>(記述式：900字以内)</p>	<p>1) 現行授業の目標と教育効果</p> <p>「領域音楽表現」「保育内容V (子どもの音楽表現)」では、保育三法令 (保育所保育指針など) が求める保育・幼児教育を踏まえた上で、領域「表現」について、保育における音楽的な表現の捉え方を基に、子どもがさまざまな音楽表現に触れ、親しみ、保育者と共に表現することを楽しんだり、子どもが主体となって表現したりできるよう、保育者として求められる表現技術の習得や、子どもの音楽表現を引き出す援助・指導法の習得をめざしている。</p> <p>授業では、身体を使い、実践的に音楽を理解し表現できるようアクティブラーニングを多く取り入れ、グループワークや発表・発言を促し、学生が主体的に考え、表現できるようにした。これによって、授業に向かう気持ちが高まったと思われる。また、教科書の活用とパワーポイントによる説明、配布プリントの工夫により、実践的学習に理論的な充足をねらっているが、提出されたプリントの記述や実技の発表から、おおむね知識の理解や技能の習得できたのではないかとと思われる。</p> <p>2) 自己評価</p> <p>子どもにとって表現することの意味や、子どもが主体的であることがなぜ重要なのか、ということ根底において、表現について学んでもらいたいと考えているが、保育者をめざす学生には心に響くところがあり、よりよい保育者となるため学びの意欲を高めていると思われる。</p>																		
<p>3 学生による授業評価も踏まえ、教育改善への取り組み</p> <p>(記述式：900字以内)</p>	<p>1) 現状の説明 (長所と問題点を含む)</p> <p>学生による授業評価では、実習で役に立つ内容であったことや、音楽を苦手とする学生からもわかりやすさが評価されており、授業の実施方法としてはおおむね良好であったと思われる。しかし、どの科目もシラバスにおける到達目標の達成がやや低く評価されていた。科目全体を通して学生自身が何を学んだのか、十分に振り返ることが難しかったのではないかとと思われる。</p> <p>「保育内容V (子どもの音楽表現)」では、歌の伴奏が容易になるようコード学習を行ったが、昨年度の反省を踏まえて改善を図ったところ、基本的な理解とコード演奏はほとんど学生に習得された。改善の他に、昨年度と同じような課題であったにもかかわらず、学生の理解が進んだ要因の一つに、学生にとって学習の第一印象が大きいのではないかとと思われる。やってみたらわかった、あるいは、わかりそうだと感じられることが大事であった。</p> <p>2) 改善への取り組み (実践例を含む)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・実践から理論の充実：実践的学習に理論的背景が結び付くことをめざしているが、本年度は身体を通して実践的に学習できるように心掛けた。次年度は理論的背景をよりわかりやすく、内容をレベルアップしたい。そのため、文献研究を充実させ、授業実践につなげていきたい。</li> <li>・コード学習：楽譜の読めない学生にとっては大変困難な内容であるため、習得レベルに応じて基礎的な学習の徹底を図るとともに、スモールステップで学習を進化、定着できるよう改善を試みたい。また、鍵盤楽器を使ったコード学習や伴奏学習では、既に鍵盤楽器の技能習得をしている学生がアシスタントとして初学者のサポートをできるように計画したい。</li> <li>・学生自身が学習のねらいを理解し、学習到達を自己評価できるよう、シラバスを照らし合わせながら各授業を再検討したい。各回で配布するプリントの始めにねらいと、最後にねらいに対するチェック項目を作成して示せるようにする。</li> </ul>																		
<p>4 教科書、教材の作成状況</p> <p>(記述式：300字以内)</p>	<p>毎回、プリント教材を作成して配布し、電子黒板によるパワーポイントと連動させて解説した。授業内容によって穴埋め式や、グループワークの計画立案のスペースを設け、授業に集中し、また自分の考えたことを記入できるようにした。多くの回では最後に省察スペースを設け、学習を基に、表現の中で生じた自分の感情を見つめ、振り返ることができるようにした。</p> <p>教材 DVD を活用して映像から音楽的発達が理解できるよう、解説を加えたオンデマンド教材 (DVD の著作権許可有り) と学習プリントを作成した。</p>																		
<p>5 学生の指導 (課外活動・厚生補導等)</p> <p>(主要 10 件以内)</p>	<table border="1"> <tr> <td>2020 年度～</td> <td>吹奏楽部顧問</td> </tr> <tr> <td>2020 年 10 月</td> <td>深川市民吹奏楽団定期演奏会 賛助出演 引率</td> </tr> <tr> <td>2020 年 12 月</td> <td>学内クリスマスコンサート実施</td> </tr> <tr> <td>2021 年 11 月</td> <td>深川市ときめきコンサート出演 (指導・引率)</td> </tr> <tr> <td>2020 年度 6 月～9 月 (週 1 回程度)</td> <td>ピアノ基礎講座 (ピアノ初心者のうち希望者への課外指導)</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> </tr> </table>	2020 年度～	吹奏楽部顧問	2020 年 10 月	深川市民吹奏楽団定期演奏会 賛助出演 引率	2020 年 12 月	学内クリスマスコンサート実施	2021 年 11 月	深川市ときめきコンサート出演 (指導・引率)	2020 年度 6 月～9 月 (週 1 回程度)	ピアノ基礎講座 (ピアノ初心者のうち希望者への課外指導)								
2020 年度～	吹奏楽部顧問																		
2020 年 10 月	深川市民吹奏楽団定期演奏会 賛助出演 引率																		
2020 年 12 月	学内クリスマスコンサート実施																		
2021 年 11 月	深川市ときめきコンサート出演 (指導・引率)																		
2020 年度 6 月～9 月 (週 1 回程度)	ピアノ基礎講座 (ピアノ初心者のうち希望者への課外指導)																		
<p>6 その他</p> <p>(主要 5 件以内)</p>	<p>なし</p>																		

研 究 業 績				
1 研究分野・活動 (記述式：350字以内)		<p>1) 研究分野          幼児の原初的な音楽の芽生えと、保育者や保護者といった子どもを取り巻く環境としての大人の音楽性や音楽の影響を研究の対象としている。前者では、身近な音素材を用いた音遊びから広がる子どもの感性の育ちや音楽的表現を追求する。後者では、手遊びなどの遊び歌を用いることで育まれる人間関係の深まりや、音楽の感覚的な習得について研究を進める。</p> <p>2) 研究活動          ・創造的な音遊びの実践を共同研究者と共に学会誌へ投稿した(リジェクト→再投稿へ)。          ・保育園とのリモート音楽会の実践報告を日本音楽教育学会で発表した。          ・幼児の音遊びに関する先行研究から動向を探った(来年度の日本保育学会のポスター発表予定)          ・幼児の音遊びの発展として、小学校音楽科における音楽づくりの学習の系統性をまとめた(本学紀要投稿中)。</p>		
2 研究課題 (今後の展開・可能性を含む) (記述式：350字以内)		<p>・幼児の音遊び：保育現場で手作り楽器や廃棄楽器の部品を利用した音環境を設定し、幼児と保育者の間に起こることを表現の観点から考察し、音楽的発達の糸口を探る。今年度は先行研究をまとめたので、来年度は実践的データを集める。創造的な音遊びは再度、学会誌への投稿をめざす。          ・昨年度の課題であった手遊び課題の授業実践が不十分であったので、再度、計画を練り実施したい。また、コロナ禍により子育て支援における親子への音楽介入が困難な状況が続き、今年度は実施できなかった。来年度は、コロナ感染状況が落ち着いた時期をねらって実践できるように準備をし、手遊びによる親子関係の深まりのデータを収集できるようにしたい。          ・子どもの歌の伴奏として学生のコード奏の習得、ウクレレ伴奏による子どもの歌の影響について、データを集める。</p>		
3 研究助成等 (主要5件程度)		<p>(1) 文部科学省科学研究費 なし</p> <p>(2) 学内 なし</p> <p>(3) 学外 なし</p>		
4 資格・特許等 (主要3件以内)		<p>中学校教諭専修免許状(音楽)・高等学校教諭専修免許状(音楽) (平成6年3月)          日本音楽療法学会認定音楽療法士 (平成16年3月)          特別支援学校教諭二種免許状 (平成24年12月)</p>		
著書、学術論文、作品等の名称 (主要15件以内)	単著 共著 の別	発行又は発表 の年月	発行又は発表 雑誌等又は発表 学会等の名称	要 約
(学術論文)				
幼児期における楽器活動の可能性	単著	2016年12月	瀬木学園紀要第10号	幼稚園の年長児が、初めて出会う楽器でどのように遊ぶのか、ビデオ記録から分析し、子どもが主体的に楽器の活動をするための方法を考察した。生き生きと熱中する中、自発的な音の探索、身体の実作、感覚を開くこと、短時間だが言葉を介さず友達と即興的にリズムが創作されること、また大人が模倣で介入することにより音遊びが発展することが確認できた。保育者による教育的配慮のもと、型の決まった音楽活動にバランスよく自由な楽器遊びを取り入れることで、楽器活動への深化の可能性を明らかにすることができた。(pp.49-57)
保育者の発声の現状—インタビューからの考察	単著	2018年3月	瀬木学園紀要第12号	保育現場における発声の現状を調査するため、A県内の保育園・幼稚園の園長ら11名と2年目保育者6名に半構造化面接法により、発声状況、声に対する考えや不調などを個別でインタビューし、SCAT(大谷,2007他)により分析した。保育者の発声は子どもの年齢や人数に応じて意図的に変えられ、保育経験により関係作りや表現力が用いられ、発声が保育観を携えていた。一方、就労1年で嗄声の事例もあり、養成段階における適切な発声法と表現力の習得が望まれる。(pp.48-55)

<p>視覚的フィードバックと基準変更デザインを用いた発声訓練の効果の検証—保育士養成校での取り組みから</p>	<p>単著</p>	<p>2018年12月</p>	<p>瀬木学園紀要第13号</p>	<p>平成30年提出の修士論文データにフォローアップ・データ(FU)を加え、iPadアプリの音量計による視覚的フィードバックと、自身の発声可能な音量を目標値に設定する基準変更デザインを用いた発声訓練の効果を検証した。FUにおいて全参加者10名の音量はベースラインより優位に増加した。うち7名が目標値を超え、必要に応じた音量コントロールのスキルが維持された。もともと音量が少ない3名は訓練により音量を増加できたが、時間経過により十分な音量の再現が難しくなり、発声訓練の継続が重要であった。(pp.14-23)</p>
<p>領域「表現」科目におけるアクティブラーニングによる学びの考察—幼稚園でのコンサート取組後のアンケート調査の分析</p>	<p>単著</p>	<p>2020年3月</p>	<p>瀬木学園紀要第16号</p>	<p>保育士養成課程2年生の領域「表現」の授業で、幼稚園でのコンサートを実施した。実施後の自由記述のKH-coderによる分析と、質問紙調査の分析から、コンサートに向けたアクティブラーニングの学びと課題を検討した。仲間と協同し音楽する楽しさ、子どもと対面することによる保育者としての自己効力感の向上が得られたが、音楽の基礎的事項や音楽的表現では習熟が十分といえない学生もあり、音楽学習におけるアクティブLでの学生自らが思考できるような方法で教員の助言が必要であることを明らかにした。(pp.44-53)</p>
<p>幼児の自発的な歌唱行動の出現とその意味に関する考察—4歳児クラスにおける自由遊びの観察から—</p>	<p>単著</p>	<p>2020年3月</p>	<p>拓殖大学北海道短期大学研究紀要 幼児教育研究編第1号</p>	<p>2つの保育園の4歳児クラスの自由遊びにおいて、子どもが自発的に歌を歌う場面をビデオ記録から抽出し、自発的な歌唱行動の出現要因を探り、歌を歌うことによって周囲の子どもとの関係性の出現、遊びのイメージ補強、気持ちの開放がなされていたことを見出した。また、担任保育士のインタビューから、子どもの会話量や音楽学習経験との関連を予測した。この知見を踏まえ、歌を歌う子どもを育てるための幼児教育への提案をした。(pp.52-63)</p>
<p>(研究ノート) イベントとしての高齢者の音楽活動を考える～地域貢献事業「みずほ・ヘルスセミナー・カフェ」での実施～</p>	<p>単著</p>	<p>2018年12月</p>	<p>瀬木学園紀要第13号</p>	<p>短大の地域貢献事業の一環で行った健康セミナーの効果をまとめた。参加者は地域に住む高齢者で、内容は健康を意識した発声トレーニングと懐メロを中心とした歌唱であった。1回のイベント性の音楽活動の効果を実施前後のアンケート調査から検討した。ほとんどの参加者の結果が向上したが、音楽のもつ効果、周到に準備されたプログラムやパワーポイントを活用した展開方法によりもたらされた効果と結論付けた。</p>
<p>(研究ノート) 手遊びの実際と課題—保育実習後のアンケート調査から—</p>	<p>単著</p>	<p>2021年3月</p>	<p>拓殖大学北海道短期大学研究紀要第1号</p>	<p>手遊びは容易さゆえ、待ち時間や導入で行われる。保育実習後の学生へのアンケートにより、現場の手遊びの実態と、手遊びに関する実習での学びを調査したところ、子どもを惹きつけるテクニックや、楽しく展開させる方法に学生の関心があり、手遊びで楽しませることが大事だと考えていることが明らかになった。手遊びに内在する身体性、音楽性、社会性といった教育的要素と遊びの展開方法を学ぶことで、子どもの育ちを支える保育教材としてとらえ直すことができるのではないかと結論づけた。(pp.53-61)</p>
<p>(その他)</p>				

<p>ダウン症児の平仮名の読み書きへの簡易な歌の活用」―特別支援学校中学部・国語指導での実践」</p>	<p>単著</p>	<p>2015年9月</p>	<p>第15回日本音楽療法学会札幌大会</p>	<p>平仮名のなぞり書きが不確実な特別支援学校中学部のダウン症児2名に、縦線や横線、結びの曲線の空書きやなぞり書きに合わせて、簡易ななぞり歌を導入した。線の流れや視点―終点を歌で明確にすることで、平仮名のなぞり書きのみならず、1名は自分の名前を正確に書くことができるようになり、日常生活で読む力の向上もみられた。</p>
<p>保育系学生の発声に関するボイス・トレーニングの成果</p>	<p>単著</p>	<p>2016年9月</p>	<p>日本保育士養成協議会第55回研究大会</p>	<p>経験不足や自信の無さから小さな声で話す学生に、ボイス・トレーニングとして発声スキルの指導を継続し、その成果をまとめた。チェックリストでは、自主的に練習が継続されないという実態の一方、相手に伝えようとする意識の向上がみられた。また、発声スキルを即座に喚起する促進キーワード使用は発声改善に有効であった。今後、練習の継続を促す指導や、人前で話す成功体験の必要性が明らかになった。</p>
<p>自由あそび場面における歌唱活動の研究 ―自発的な歌が生まれる要因の探求</p>	<p>単著</p>	<p>2017年5月</p>	<p>日本保育学会第70回研究大会</p>	<p>自由あそび場面で見られる子どもの自発的な歌を、2つの保育園の年中児クラスで約5か月間観察し、そのビデオ記録を分析した。印象の強い歌、言葉に抑揚をつけた節の繰り返し、既知の曲の替え歌など、遊びの中で気持ちにゆとりができた頃に、特定の子どもに自発的な歌唱行動がみられたことを報告した。</p>
<p>地域貢献活動を通じた表現授業の考察―事後レポートのKHコーダーによる分析から</p>	<p>単著</p>	<p>2018年10月</p>	<p>第49回日本音楽教育学会岡山大会</p>	<p>A 短期大学保育士養成課程2年生が2つの地域貢献活動(就学前の親子講座、近隣幼稚園へ出張コンサート)を通して得た学びについて、事後レポートをKH Coderにより分析し、「保育の表現技術」科目における学びの深化を検討した。実際に子どもとかかわることで、子どもの自由な表現を知り、よりよく子どもを受け止め、寄り添おうとした考えがみられた。基礎的な学習時間とのバランスをとりながら、これらの学びを継続させることが重要で、実際の子どもの触れ合いと往還させる学習が理想と結論づけた。</p>
<p>大学生の声による表現に関する一考察―教養科目の事例分析を通して</p>	<p>単著</p>	<p>2019年8月</p>	<p>第24回日本学校音楽教育実践学会奈良大会</p>	<p>A 大学の教養科目「人間と音楽」の受講学生の大半は学校以外の音楽教育を受けておらず、自信のなさも目立った。学生の心を開き、自発的な発声と音楽表現への取組を促す授業展開の工夫について、課題の取組状況と学生の感受を記述するワークシートなどの分析を基に考察とした。その結果、取り組みやすい課題の反復実施、仲間との協同による取組、ワークシートによる振り返りの実施の3つが学生の取組を促したと推測した。</p>
<p>子どもの素朴な表現をひろいひろげる保育者の音楽的資質―平成30年度改定保育所保育指針から考える</p>	<p>単著</p>	<p>2019年10月</p>	<p>第50回日本音楽教育学会東京大会</p>	<p>平成30年改訂保育所保育指針では、より一層子どもの主体性への視点が求められている。子どもの表現は素朴で、伝える目的がないもの、表出に至らない内面の動きもある。このような内面や表現をいかに拾い上げ、共有し、表出から表現へ促すために、保育者にどのような感性や表現技能が必要か考察を試みた。子どもの表現の質感ごとを模倣し応用できる表現力、周囲の子どもへ伝える間合いや誘い掛け、といった豊かな言語・非言語の能力が必要と考えた。このような音楽的感性と表現力を養うには、従来の西洋音楽の枠組みのみでなく、現代音楽の手法や多様な文化の音楽から広く学び、豊かな音や声で柔軟に表現のやり取りができる能力を養う必要がある。領域を関連させて総合的に学ぶ教育の視点も望まれる。</p>

子どもから高齢者までをつなぐ「理想的な社会」を展開する保育園構想 ―岐阜県M市への提案―	共著	2020年5月	第73回日本保育学会奈良大会	人口減少、ダイバーシティといった課題をもつ地方都市での新保育園建設計画を機に、これからの時代に適応する保育園を構想した。地域と保育の連携・協働を実現する複合型施設として、保育園にカフェ、産直野菜販売所、学童施設などの機能、サービスを併設することで、多様な地域住民の交流と、子育て世代の負担軽減を図ることが可能となる。本構想を通し、少子高齢化する社会における保育園の在り方を検討する必要を説いた。 (P-B-1-4)
3歳児の創造的な音あそび ―音・モノ・自分―	共著	2020年5月	第73回日本保育学会奈良大会	A市立保育園3歳児15名を対象に、身近な音素材として新聞紙を用いた音あそび(1回40分、全6回)を実施し、ビデオ記録、事後検討会、担任保育士の記録から分析した。遊びの中で素材との向き合い方を丁寧に示し、子どもが自由に表現できる場を作ることで、表現に広がりや自由さがみられるようになった。また、担任保育士は音という視座から環境構成を行うようになり、子どもが音を通じて環境と関わる感性が養われたことを確認した。 (K-A-3-015)
3歳児の新聞紙を用いた音遊び ―保育への展開に着目して―	共著	2020年10月	第51回日本音楽教育学会オンライン大会	保育園3歳児15名を対象に新聞紙を用いた音あそび(1回40分、全7回)の保育への影響について、担任保育士の記録およびインタビューから考察した。本あそびでの「音を聴く」「自分の表現が受け入れられた」という経験が、生活や遊びの中で音への気付きや感覚を高め、素材と音質の関係や音が鳴る仕組みの気付き、自然な楽器の導入、音とイメージを活かした劇遊びへつながっており、表現意欲を促したと推察した。(p.24)
コロナ禍で開始された乳幼児向けリモート音楽会の成果と課題―保育者と学生へのアンケート調査の結果から―	単著	2021年10月	第52回日本音楽教育学会京都大会(オンライン開催)	新型コロナウイルス感染拡大により急きょリモートで行った保育園とのクリスマス音楽会について、実施後の保育者と学生へのアンケート結果から、成果と課題を探った。乳幼児期では対面をベストとしながらも、コロナ禍の子ども達が園以外の人と音楽で交流でき、ハンドベルや手話ソングのような文化に触れ、保育者や友達と音楽に親しむ機会を提供できた。課題として、特に0.1歳児では画面認識などの能力から、そばにいる保育者の配慮の必要性、通信機器の習熟が挙げられた。 (p.18)

研究業績(過去3カ年分)

著作数	論文数	学会等発表数	その他	国際的活動の有無	社会的活動の有無
0	4	6	0	無	無

学内運営業績

1 役職、各種委員会等 (主要10件程度)	2020年度～	教務委員会 委員
	2020年度～	就職委員会 委員
	2020年度～	FD委員会 委員
	2020年度～	保育学科実習担当者会 委員
	2020年度～	自己点検・評価委員会 作業部会委員

学外活動業績

1 本学以外の機関(公的機関・民間団体等)を通しての活動 (主要10件程度)	2006.1	金山音楽プラザ・ロビー・コンサート
	2013.11	金城学院大学人間科学部芸術療法学科 第8回音楽療法講演会 スーパーバイザー
	2017.2	岩倉市「子育て・親育ち」講座 講師(認定こども園ゆうか幼稚園)
	2014.7～2018.2	犬山市母子生活支援施設キルシエハイム 音楽療法 講師
	2019.7～2020.2	(社)犬山福祉会 乳児院 音楽活動 講師
	2021.12.4	道民カレッジ連携講座・深川市民公開講座「歌って健康～息・声・歌～」 講師

2 学会・学術団体等の活動  (主要 10 件程度)	日本音楽教育学会 会員 (2015～)
	日本音楽療法学会 会員 (2001～)
	日本保育学会 会員 (2016～)
	日本学校音楽教育実践学会 会員 (2019～)